

小平市公共施設マネジメント推進委員会

日 時 令和2年8月4日 午後2時00分～午後4時00分

場 所 WEB会議 (ZOOM)

出席者 推進委員 7人

出席課 9人 (行政経営担当部長、公共施設マネジメント課長、公共施設マネジメント課長補佐2名、公共施設マネジメント課担当係長2名、教育総務課長、教育総務課長補佐、学務課長)

傍聴者 2人

1 開会

2 小川駅西口公共床の修正レイアウト(案)について

資料1の概要を説明した。

質疑

C委員:意見募集結果の延べ36人184件の内訳として、これまでワークショップに参加された方と、新たに参加された方の割合は。

公共施設マネジメント課長補佐:どちらの方もいるが、割合は出していない。

E委員:おはなし室から屋内避難階段1へ通れるように扉を設置した方が避難しやすい。

公共施設マネジメント課長補佐:5階は各部屋から廊下を介して、避難階段を使用する想定。4階は全体が部屋のようにになっているため、まずは避難階段2を使用することを想定。予備として避難階段1がある。検討はする。

F委員:キッズスペースやおはなし室は幼児用のためセキュリティ上、外部との接触する部分を増やしたくないという考えも想定される。

E委員:避難が必要な時に冷静に職員が対応できるのか、ソフトな対策を講じる必要がある。外部者が侵入できないようにするには施錠等で対応が可能と考える。避難階段2まではキッズスペースから距離があると考え。

公共施設マネジメント課長補佐:避難階段の扱いとして、常時使える階段という捉えにもなり、おはなし室と屋内避難階段1の間に扉を設置すると、出入り可能という扱いになるため、現時点では、当位置には扉は設置していないが検討する。

D委員:市民の方からの意見について、取り入れた理由、取り入れなかった理由の説明が大切である。

公共施設マネジメント課長:今後のワークショップやヒアリングで、寄せられた意見に対する市の考えや反映できなかった理由や主旨を汲んで変わりに対応した内容等を説明していく。

D委員:設計図面だけでは空間が分かりにくい、例えば、図面上にゾーニングして色を付けるとか、来館してからの動線を示すと利用者に分かりやすい。

公共施設マネジメント課長補佐：今後の説明について、3D動画を用意している。

A委員：具体的にレイアウトの決定時期はいつになるのか。

公共施設マネジメント課長補佐：8月にワークショップ等により意見をいただくものを踏まえ、10月にオープンハウスで公表するものが完成図面となる。

A委員：オープンハウスとは具体的に何をするのか。空間を示すものか。

公共施設マネジメント課長：レイアウトをパネル展示して市民の方に完成図を示す。時間を指定せずに自由に見られるという意味でオープンハウスと名前を使っている。

B委員：駅前にある図書館としての新しい試みはあるのか。予約や返却方法やオンラインの情報収集等、レイアウト案に反映されているものがあるか。駅からのアクセスについて、進捗状況を知りたい。

公共施設マネジメント課長補佐：本の貸し出しを無人で行う等の検討をしている。

公共施設マネジメント課長：駅からのアクセスについて、引き続き検討している。

E委員：3Dの映像について、オープンハウス期間から見られるのか。8月5日からの意見募集の期間から見られるのか。

公共施設マネジメント課長補佐：8月5日からの意見募集の期間から見られる。ホームページにて周知する。また、来庁者にご覧いただきたいため、市役所の1階でも動画を放映する。

A委員：駅前であるため、通勤・通学者が利用しやすい機能や運営の仕方はあるべきと考えるがどうか。オンライン予約というのが主流になってきているので、新規性でいうと貸し出し返却の関係だと思うが、ニーズにマッチしたアピールポイントは。

公共施設マネジメント課長：設備や運営については、次の段階で、ニーズを踏まえ可能なことかどうか等、所管の図書館と検討していく。

B委員：駅前であるため、返却のニーズは想定される。運営に関することを今後検討することでレイアウトに影響が出るかもしれないが、柔軟に対応する必要がある。

F委員：市民説明の際に、市民から意見を受けるだけでなく、図面を作成した専門家からフィードバックすることもまた重要である。

公共施設マネジメント課長補佐：8月に実施するワークショップでは、設計者もワークショップに参加し、市民からの意見や思いに対し、説明をしていく。

3 小平第十一小学校へ複合化する施設の検討状況について

資料2の概要を説明した。

質疑

A委員：公有財産の集約化という意味で、公共施設の縮減の外的話だが、大沼グラウンド・市民広場等のグラウンドについては公有財産であり、十一小を更新した後のグラウンドの一般開放で近隣のグラウンド使用のニーズについても対応できるのであればと考える。現在は一般開放を行っているか。

学務課長：学校の校庭については、平日は学校終業後、遊び場開放として、その学校に通って

いる児童が利用できる。土・日曜日は文化スポーツ課が団体利用の貸し出しを行っていて、利用状況として、その枠は、ほぼ埋まっている状況である。

公共施設マネジメント課長:花小金井4丁目の市民広場については近接している。現状の用地の範囲でグラウンドの共有は不透明であるが、場合によっては用地の拡張も検討しながら、グラウンドの共有化が可能かどうかとも検討する。

A委員:学童クラブの複合化というのは学校財産に位置付けになるのか。改修は伴うのか。

公共施設マネジメント課長:学校の財産という位置づけではなく、結論はまだであるが、小学校に公民館や地域センターの複合化も検討していて、それらと同様で学校施設以外のものは他の位置付で複合化する。改修ではなく、新築となる。設計の時点で、エリア分け等の検討を行う。

D委員:従来の機能の足し合わせ的な複合化でいいのか。人数が少ないから面積を減らしているのか。複合化することで面積を融通できるようなメリット等を見直さなければならないと考える。コロナを踏まえての方針を決める必要がある。

公共施設マネジメント課長:ウィズコロナ・ポストコロナと言われている状況下であり、公共施設のあり方についても考えなければならないと認識しているが、一方で現段階では、コロナが終息して評価をされている段階に至っていない。将来的にワクチン等により社会的に許容されるリスクとなる可能性もある。そのため、今後の形を示す段階に至っていない。

D委員:対ウィルスについては、そうかもしれないが、コロナをきっかけにして、オンライン活用等の価値観の変化が社会的に起きている。元に戻ることの想定でいいのか。オンラインで代わられる機能も考える必要がある。市が作成する当委員会等の資料においても、何も触れずに進めるのではなく、どう踏まえるかという姿勢は示す必要がある。

B委員:学童クラブのニーズが変わってくる。今までは、プラスアルファの機能であったが、今後はそれが、ノーマルになる。学校施設の考え方が変わる。パブリックな学びをする場と放課後のプライベートの場をどう切り分けるか非常に重要な問題。学童クラブは、学校とはむしろ別の機能という考え方も出てくる。

A委員:従来の考えで学習環境の維持の問題だけでなく、公衆衛生の観点も考えると学校施設に高齢者施設を複合化するというのは慎重に考える必要が出てくる。同じように集会施設も、地域センターにおいても児童福祉の部分だけとか。利用者の公衆衛生の観点の総論が必要。

公共施設マネジメント課長:地域センターにおいては、どの世代も使える施設であり、多世代の交流をする必要があると考えている。小学校を中心として地域のコミュニティを醸成するということが複合化のひとつの目的であり、そのうえで配慮すべき点について、配慮していく。

F委員:多世代というのは、誰なのか見えづらい部分もある。地域コミュニティの醸成について、主体となる者が誰を想定したのか。そこを丁寧に説明することで、複合化すべき機能がクリアになる。どういう場を多世代交流なのかのビジョンが必要。

公共施設マネジメント課長:十一小は学校の更新であり、主役は児童となる。プラスアルファとして地域コミュニティの醸成として周辺の地域対応施設を複合化したいと考えている。

A委員:今回の複合化の検討対象とする6つの施設のうち、保育園の需要が高いと思うが、保育園は複合化になじまないということか。

公共施設マネジメント課長:当地域の保育園のあり方を所管と調整し、考える必要がある。利用率で

いうと学童が高い。なじまないということではなく、利用率も含め、他の施設との比較優位で検討していく。

A委員:地域センターや公民館の利用率が低いところもある。実際にどう利用されているかも踏まえなければならないが、複合化する場合、利用度に見合った縮減や統合の集約的な議論は必要である。

公共施設マネジメント課長:公共施設マネジメント課の観点から利用状況に応じた床面積を検討していく必要はある。一方で、現在の数字で表れていない部分として、例えば花小金井北公民館はバリアフリーがされていないから利用率が低いという所管の分析もあり、地域のニーズをしっかりと捉え、適正な床面積を検討していく。

A委員:機能か、施設かいずれかを抜き出して、複合化していくのか。

公共施設マネジメント課長:施設となる。

A委員:学童クラブは需要も増えているところであるが、学校の中に入れていくという考えか。

公共施設マネジメント課長:現状、小平市の特徴として、学童クラブは学校の敷地内としている現状がある。

B委員:学校の敷地内と建物の空間内という違うニュアンスがあるが、学童クラブは通う数が爆発的に増えていて、学校の建物の空間内でニーズを受け止めるのは難しい。学校の敷地内に学童クラブや公民館の一部や図書館の一部が複合化するような運営形態は小平市内にあるのか。

教育総務課長補佐:現在の状況では、学校単体がほとんどある。一部、高齢者の施設が入っている学校の建物もある。学童クラブは学校の建物ではなく、学校の敷地内に別の建物で設置されている。学校の教室や空き部屋を学童クラブとして使っているものもある。

B委員:学校の敷地内に二つの建物の空間があり、連携すると考えていいのか。

公共施設マネジメント課長:建物を空間的に分けることもあり得るが、今までに取っていない形態であり、学校施設とハード面で複合化することも想定され、今後検討する。

A委員:地域センターと公民館は利用者が似ているが、学校と複合化する時に、児童の学習環境の阻害されないことや公衆衛生の問題がある。実際の利用形態に違いが出てくるのか。

公共施設マネジメント課長:地域センターや公民館については類似性・親和性がある。設置の目的は異なるにせよ部屋の利用形態について、さほど大きな違いはないのではないかと。

G委員:文部科学省からも小学校を核とした地域コミュニティを作っていこうという話がある。小平市の中でも様々な所管の施設が複合となるため、問題が起こった時の解決について等、すり合わせをしておく必要がある。

六小は、高齢者が入ることができるスペースがある。十一小も同じように高齢者が入れるスペースを作り、子どもと交流する形もあると考える。

以前、十一小の保護者や先生に行ったアンケートの結果も踏まえてほしい。教育委員会の考えを聞きたい。

教育総務課長:教育委員会に持ち帰り情報を共有し議論を進めている。

F委員:十一小の複合化で想定している交流のシーンは小学生なのか、卒業した大人たちなのか、分からなかったが、小学生だということが先ほどの説明で理解した。複合化施設に入ってくる市民の活動と小学生がどのように交流するのか、市として明確に持つておく必要があり、それ

を踏まえて、議論をした方がいい。複合化ありきの議論になっているが、無理に複合化をする必要もないという選択肢もあると考える。

D委員:施設としてのテーマを決め、それに沿って集まってくる。コンセプトがあると、それにあった施設になる。単に総量の縮減の複合化ではなく、施設の価値を作ることが必要。

A委員:十一小の地区としての特徴はあるか。

公共施設マネジメント課長:地域ごとの特徴は庁内で議論をしているが、小平市において、東西で若干の人口の増減差はあるものの、特色のある地域性というのはいみ出せていない。推進計画の中にあるとおり、学校の敷地面積が大きく市内全域をカバーするとともに、防災の拠点となっており、認知度が高く、青少対、自治会における活動で既に小学校が拠点になっている。さらに、プラスアルファで公民館、地域センターで活動しているものを教えていくこと等の交流が生まれてくることを想定している。

E委員:市の説明が文書に載っていない部分がある。複合化の対象にしない施設の理由や、小学校を中核にするという重要なことも記載されていない。議論が組み立てられるような文書にする必要がある。

公共施設マネジメント課長:出来る範囲で配慮するが、一方で資料の見やすさを踏まえると情報量を詰め込み過ぎると見にくいという面もある。これまでに示してきているものについては、改めて記載することはしていないところである。見やすさと説明のバランスを工夫しながら、委員ご指摘のとおり、委員や市民にとって理解しやすく、活発な議論につながるような資料づくりに取り組んでいく。

4 公共施設マネジメント推進計画における延床面積縮減に向けたシミュレーションの実施について

資料3の概要を説明した。

A委員:学校再配置に関するシミュレーションで小学校2校に対して中学校1校となっているが、これは全体の縮減する計画数との整合はあるということでしょうか。

学務課長:小学校が19校から14校に縮減、中学校が8校から7校に縮減することから、割合として、小学校2校に対し、中学校1校となっており、整合している。

5 その他

公共施設マネジメント課長:前回の公共施設マネジメントの後に、委員から情報提供依頼があったため、学童クラブの設備及び運営に関する基準について参考資料を提供した。次回の公共施設マネジメント推進委員会は令和2年10月30日に開催する予定。

6 閉会